

## VII. む す び

本報告の全体をふりかえって、そのやや入り組んだ論旨を整理してむすびとしよう。

われわれは「公共向上訓練に基礎的なものが求められている」という事実注目し、それを分析の対象とした。この事実の意味するものを追求することが向上訓練の向上訓練たる所以を明らかにすると考えたからである。われわれの検討はどうしても「向上訓練」に対して「養成訓練」を念頭に置かねばならなかったし、「訓練（教育）」や「習得（学習）」に対して「生産」を念頭に置かねばならなかった。こうした他のものとの関連の中でしか向上訓練の何たるかを考えることはできないのだから。（公共向上訓練と事業内の向上訓練との間の検討は行なっていない。それは議論をより具体化する上で重要な点だが、あとで述べるように本報告ではそのために必要な論点が落ちている。今後の課題としなければならない。）

そこでわれわれの行った作業は「技能・基礎」を考えようとする時の“むずかしさ”そのものの検討だった。その検討を経てわれわれの提起したものは、向上訓練を“とらえなおし”と見ることの重要さであり、その“とらえなおし”ということを経験化するための“ものさし”という観点であった。“とらえなおし”とか“ものさし”とかを提起したからといって、それは「技能・基礎」という見方を否定しようということではない。むしろ逆である。筆者は、Ⅲ～Ⅴ章を通して、“とらえなおし”や“ものさし”という観点が、われわれが「技能・基礎」と呼ぶものをとらえる上で重要な手掛りとなることが言いたかったのだし、「技能・基礎」そのものが“とらえなおし”や“ものさし”という観点を要求するのだということを描き出したかったのである。そのようなものとなり得たかどうかは大方の読者の御批判を待つ他ない。

ともあれ“とらえなおし”とか“ものさし”の観点から見ると、向上訓練の教育的意味の深さと広がりをはっきりしてくる。向上訓練の可能性は、単に技能的な「追加」や「矯正」や「まとめ」といった言い方ではカバーしきれない、新鮮なおどろきと積極性を伴った「能力」の質的变化、さらにはその人の「や

る気」や「モラル」にも関わる人格的な成長にまで及ぶものであるのだ。

向上訓練は、それ自身の性格によって、生産と教育、OJTとOffJT、実技と学科、技能と技術、等々の基本的問題を前面に押し出してくる。向上訓練の基本問題は教育・訓練の基本問題である。この点は訓練に直接携わる実践的立場から見ても、様々な学問領域から向上訓練にアプローチしようとする研究的立場から見ても変わりはない。だから、これらの基本問題を回避しては向上訓練の何たるかをとらえ、評価することも、またその改善と発展を生み出していくことも充分にはできない。

この報告書にまとめた仕事はこうした考えに貫かれているが、この考えに到らしめた直接の手がかりとなっているものは「公共向上訓練に基礎的なものが求められている」という事実であった。したがって、上に向上訓練一般について述べた点は、さらに強い意味で公共向上訓練に当てはまるものと筆者は考えている。公共向上訓練の諸困難が基本的問題に根ざしているものであり、何かちょっとしたうまい手で回避できるような性質のものでないのだとすれば、それは逆に、公共向上訓練の社会的意味の大きさ、言ってみれば教育・訓練の“正統の嫡子”たることを証明しているのだとさえ言えよう。少なくとも、うえに述べたような今日ますます重要さを増している基本的な諸問題を洗いざらい押し出してくる公共向上訓練は、教育・訓練にとって、またその研究にとって“醜態ダル”か“るつぼ”のようなものであることは間違いない。以上のことは本報告書の検討の副産物として（「副産物」と言うにはあまりに重要すぎるが）読み取っていただけるならば幸いである。

本報告書ではこうした基本問題から向上訓練研究を進めるべく「基礎・技能」の理論的な検討を行なった。論点を一步具体化するために教材論の問題も取り上げた。これらの各章については読者の御批判を待つ他ないが、ひとつだけ釈明しなければならない点がある。今後の研究のために論点を具体化する上で、重要な議論がひとつ落ちていることである。それは“雇用と労働市場”の問題である。当初の計画では“教材論”と並んで取り上げる予定であったが、1章にまとめることができなかった。今後の課題とせざるをえない。本報告書の立場からどのような意味で“雇用と労働市場”の問題が重要な議論となるのかに

ついて以下に示しておきたい。

第一に、Ⅱ章でも触れたように「基礎」を具体的に考える時に「標準性」ということは避けられない問題である。「基礎」の問題を「標準性」という次元で考えるためには労働市場（および市場一般）の議論をしなくてはならない。そして、生産物の標準性（JISなどの問題につながる）や技能の標準性（資格の問題につながる）と共に作業工程の標準性や教育・訓練の標準性が問題にされなくてはならない。これらをばらばらにした「標準性」の議論は一面的なものに終るだろう。

第二に、技能および技能形成の理解が労働市場の理解を規定し、労働市場の理解が逆に技能形成の理解にはね返っている事実がある。今日その典型的な例は“内部労働市場論”と言われるものである。内部労働市場論の観点からはOff-J-T自体がO-J-Tの補助的な役割を果すものと見なされる<sup>(1)</sup>。こういう内部労働市場論が前提としている技能および技能形成の理解はどういうものか、十分に検討されなければならない。今後の課題としたい。

#### Ⅳへの注

- (1) 「真の技能形成の場は、主として職場における仕事であり、経験であった。」「Off-J-Tは、O-J-Tの節目節目の、いわば補完物にすぎないのではなかろうか。」「熟練形成の主役は企業内でひろがるキャリアと考えられる。」（小池〔43〕PP. 4～5）